

共同研究 ● 政治的分類—被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する（2014-2017）



壁画に描かれた「背（骨）を折る者」（q'ajöy iy、カホヒイッヒ）。手前に座っている2人は、昼食中のマヤ男性。2012年、新市長の意向によりすべての壁画は消去された（2006年9月、グアテマラ共和国）。

本共同研究は、平成26年10月に開始し、2回の共同研究会を開催してきたにすぎない。いまだにその活動を成果としてまとめて報告できる状況にはないため、今回は共同研究の代表者としてこのテーマを発想するに至った経緯を中心に、これから検討することになるいくつかの疑問を略述したい。

1つのイメージ

本共同研究を組織するにあたり最初の着想は、2006年の夏、グアテマラ共和国北西高原地帯のある町役場の壁に描かれた異形の存在 q'ajöy iy（カホヒイッヒ）を見たときまで遡る。カクチケル語のこの呼称を字義通りに訳せば、「背（骨）を折る者」である。人間の男性と牝牛との間に生まれ、上の写真のように、頭部は牛、身体は男性の姿をしており、鋼鉄の鎧を纏っている（太田2008: 148）。

このイメージのもとになっている伝承を、町の人びとは次のように語る。この異形の存在は、近隣のマヤたちを、背（骨）を折るという残虐な手法で殺害しては、その肉を食する。困りはてた人びとは一計を案じ、これを退治する、と。伝承では「背（骨）を折る者」の父親は牧場で働くラディーノ（グアテマラにおける非マヤ系住民、カクチケル語の表記では

mosö'i [モソイ]）という想定であり、マヤから見たラディーノの非道徳性、残虐性がこの表象に込められている。

近代国家の適切な主体を自認するラディーノは、マヤはいまだに遅れた存在にすぎないという。しかし、文字による対抗言説とはなっていないが、マヤもラディーノを見返しており、マヤの伝承に残るこの異形の存在には、マヤにとってのラディーノ観が横溢している。

見返される視線への深い関心が、文化人類学の姿を変える力になり得るのであるか。本研究の外枠をなす疑問の1つである。

ポストコロニルになろうとする学問

文化人類学は近代における他者を研究対象として成立した経緯をもつ。研究の眼差しは、たとえば、先住民やマイノリティ、といった西洋から見たとき近代の周縁に位置づけられた人びとへと向かった。コロニアリズムの時代にリベラルな思想を体現した文化人類学は、フィールド調査により他者へと接近し、周縁化された存在の復権と近代批判を目指した。だが、こうして暗黙の了解となった眼差しは、他者化する側の立脚点を不可視のままに放置することを許した。換言すれば、見返される眼差しを無視できる特権を保持し続けてきたのである。

やがて、さまざまなフィールドで、文化人類学者は現地の人びとから批判を受け、他者化する眼差しの中に潜む特権に気づかされ、戸惑う経験をいくつも報告するようになる。こうして、コロニアリズムへの批判が文化人類学に反省を迫るようになった。文化人類学がポストコロニルになろうとするとき直面する課題の1つは、この疑問に対し理論的応答をおこなうことである。

見返される眼差しという意味では、壁画に描かれた「背（骨）を折る者」やその物語には、先行する研究蓄積がある。一般書の『ブラック・エルクは語る』はオグララ・ラコタから見たワシチュー（白人）に関する記述に満ちている。民族誌の中には、70年代のアパッチから見た白人表象、最近では独立後のパプア・ニューギニアにおけるオロカイヴァから見た白人表象など、詳細な記述もある。しかし、それらの表象は、研究対象として客体化されており、他者化する眼差しを問い直すという反省的作業、すなわち、先ほど提示した疑問への理論的応答を生むのは稀である。

いま述べた状況の中、マイケル・タウシグの『ミメシスと他者性』（Taussig 1993）は、1つの反省的視座を提供する。タウシグは、クナの治療儀礼用人形が白人の姿をしていることに着目する。治療人形を研究対象として捉えず、白人の姿を模倣した人形の中に白人である自分自身の姿を認め、他者化する視線を疑問視する方向へ踏み出す（Taussig 1993: 8）。タウシグにとり、それは対象との距離により担保されてきた確定性を失い、自らを不安にする感覚と向き合うことになる

(Taussig 1993: xv)。

文化人類学がポストコロニアルになろうとすると、クリフォード (Clifford 2013: 101) によれば、選択肢は大きく分けて2つあるという。1つは、研究対象との共同作業を重視するアクティビズムであり、もう1つは現実の複雑さへの自覚を基盤にした文化批評の立場である。私は、後者の選択をおこなった (太田 2008: 217)。しかし、本共同研究では、それら2つの選択肢を結びつける可能性も模索することになる。

不安から反省へ

当初、私にとって、「背(骨)を折る者」のイメージに集約されたエスニシティ間の関係性は、研究対象にすぎなかった。しかし、自らが見返され、名指される位置に置かれるにはそう時間はかからなかった。前述したタウシグが感じた不安は、現実のものとなった。

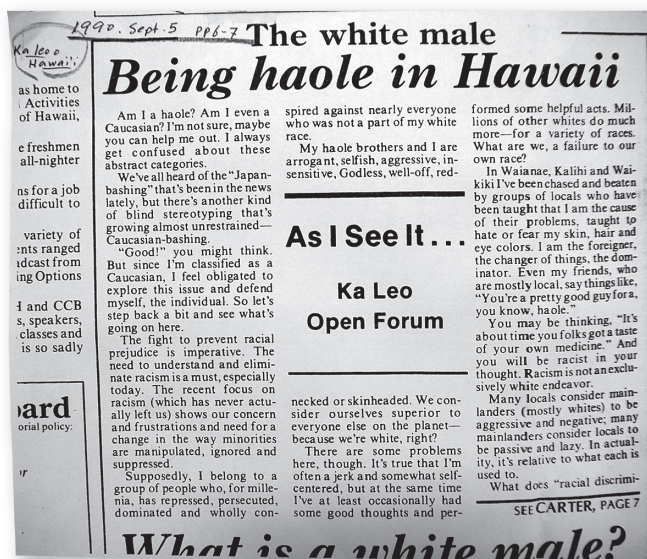
クリフォード (Clifford 2013: 6) は、脱植民地化を出来事として捉えず、現在へと姿を変えて継続する概念であるとしたうえで、先住民性は脱植民地化が再創造された考え方であると述べている。とすれば、とくに先住民研究では歴史性を無視できなくなる。それは、歴史のどこに研究者自らを位置づけるのか、という問いに対する回答を用意しなければならないという意味である。

私は、近年の沖縄県における言語復興、すなわち「シマクトゥバ (琉球諸語の総称)」の復興に関心をもったが、すぐに言語多様性の尊重というリベラルな価値に立脚した部外者の視点を反省するよう求められた。誰がシマクトゥバを奪ったのか、と。私は、ヤマトウ (日本本土の人) としてその問いに答えなければならないと感じた。琉球民族を先住民として認知するよう求める国際的活動は約20年の歴史をもち、現在ではこの問いを避けては通れない。

アイヌ語の現状を知るとき、同じ問いについて考えざるを得なかった。私は日本に生まれ、日本語を学び、自己表現している現状を、日本人には当然であると考えてきた。しかし、



最近、沖縄県下各地ではシマクトゥバによる表示をいたるところで目にするようになった (2010年8月、沖縄県石垣市)。



ハワイ大学マノア校の学生新聞 *Ka Leo O Hawaii* (1990年9月5日) のコピー。「ハオレ」と名指され、不安と戸惑いを感じた米本土出身の白人青年による投稿。

それが当然ではない歴史を背負ってきた人びとがアイヌ民族であり、私はアイヌ民族から見れば「シャモ」という呼称により名指されるカテゴリーの一員である。その名指しにより、アイヌ語を奪ったのは誰なのか、と問われている気がする。

ヤマトウ、シャモという呼称に纏わりつく居心地の悪さや不安は、名指される経験から生じる。人種やエスニシティというカテゴリーで他者を名指す行為は、人種主義、民族絶対主義であると批判されて久しいとき、さまざまな支配者たちを名指すカテゴリー——モンイ (ラディーノ)、ヤマトウ、シャモなど——に理論的価値はあるのか。ローラーによれば、ハワイ語の「ハオレ (haole)」という呼称は、白さを指すコロニアルなカテゴリーであり、歴史的、政治的分類であるという (Rohrer 2010:32)。

本共同研究のテーマとなっている政治的分類とは、ローラーの分析のように、それらのカテゴリーに理論的価値を見出そうとする考えの別称である。本共同研究は、コロニアリズムがもたらした歴史の内側から、人種やエスニシティというカテゴリーを捉え直す試みである。その結果が、ポストコロニアルになろうとする文化人類学が見出した選択肢について再考する契機ともなるに違いない。

【参考文献】

Clifford, J. 2013. *Returns : Becoming Indigenous in the Twenty-First Century*. Cambridge: Harvard University Press.
太田好信 2008『亡霊としての歴史——痕跡と驚きから文化人類学を考える (叢書・文化研究)』人文書院。
Rohrer, J. 2010. *Haoles in Hawaii*. Honolulu: University of Hawaii Press.
Taussig, M. 1993. *Mimesis and Alterity : A Particular History of the Senses*. London: Routledge.

おた よしのぶ

九州大学大学院比較社会文化研究院教授。専門は、文化理論、先住民研究 (とくに、グアテマラ共和国・マヤ民族)。著書に、『増補版・トランスポジションの思想』(世界思想社 2010年)、『増補版・民族誌的近代への介入』(人文書院 2009年)。編著に、『政治的アイデンティティの人類学』(昭和堂 2012年) など。